

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第3号

目次

父 田中秀央の「思ひ出の記」 山崎 和夫 ……………2	日誌 ……………8
研究活動の資料とアーカイブズ 森本 祥子 ……………5	資料提供のお願い ……………9
大学文書館の動き： 第三高等学校新徳館の屋上塔屋が 復元されました ……………7	講座制の歴史の一コマ - 講座給について - 嘉戸 一将 ……………10



第三高等学校本校



竣工したばかりの第三高等学校本館(1936年6月)

1889(明治22)年に大阪から現在の京都大学の本部構内に移転してきた第三高等中学校(1894年に第三高等学校と改称)は、1897(明治30)年の京都帝国大学の創設とともに敷地と建物を京大に譲り、道一つ南側の吉田二本松町——現在の総合人間学部構内——に移った。そのとき建てられた本校は、木造2階建ての簡素な造りで当時の官立学校の標準的なスタイルのものであった(写真上)。この本校が1934(昭和9)年の室戸台風で倒壊した後、新たに鉄筋コンクリート造3階建ての本館が建てられた(写真下)。この建物は、戦後第三高等学校が廃止されてからも分校、教養部、総合人間学部のA号館として親しまれていたが、先頃老朽化のため取り壊された。

父 田中秀央の「思ひ出の記」

京都大学名誉教授 山崎 和夫

ギリシア・ラテン語の教授であった父田中秀央^{ひでなか}は、いろいろな意味でユニークな人であったが、終戦の翌年に京大を停年退官したので、今ではご存知の方は少なくなった。彼の残した、数万点に及ぶ書簡、ハガキ、講義ノート等が今年京大大学文書館に寄贈され、現在整理中の由である。その中に彼が八十歳になった日に書き始めた「思ひ出の記」が私の手元にあったので、私の目にとまったいくつかを父についての私の思い出も加えてご紹介したい。それは父の手書きで、四百字詰めにして三百枚ぐらいを大学ノート四冊に記したものである。

父は明治19(1886)年3月に宇和島在の三浦村の没落庄屋の四男として生まれた。秀央という名は彼の祖父が還暦の年に生まれたのを喜んで命名し、可愛がってくれたそうである。「思ひ出の記」は幼少の頃から大正9(1920)年東大講師より京大へ転ずる頃までの話が主である。三高生時代は別として残念ながら京大の頃の話は少ないが、そのほうが古い話なのでむしろ興味深い。初めの方には、百年以上昔の田舎の子供の遊びが三十余種類も詳しく書いてある。独楽、木登り、女郎蜘蛛の喧嘩、川えびや目白とり、山野の木の実とり、などなど…。紙数の関係で、ここでは父がその人生での最大の喜びと書いている三つをご紹介します。それは(1)三高合格(2)初恋

成就の結婚(3)借金棒引き、である。

(1)三高合格。

明治36年その頃自称カエル(井の中の蛙大海を知らずの意味か?)の父が、



最年少で田舎の宇和島中学から天下の(旧制)第三高等学校に合格した事である。彼の受験勉強はただ中学校四五年の教科書を繰り返し繰り返し勉強する事で、唯一の例外が百頁ほどの英語の問題集だけであったそうだ。中学の卒業が3月で6月に三高の入試があり、その入学は9月でここに半年の間隔があった。三高から大学へは6月卒業、9月入学であった。この制度は今でも使えるのではなかろうか?もちろん現在では高校から大学の段階で半年の入試期間を置くことである。その頃の父は割合のんきで、多分その年には合格は難いだろうぐらいの気持ちでいたらしい。それが宇和島町役場へ官報を見に行き、そこで自分の名前を三高の合格者の中に発見した時の喜びを、私の一生の最大の喜びであったと思うと書いている。この話は私の子供の頃に父の口から何度か聞かされて、私もそこを目指す事になった遠因かもしれない。

編集部より

本年6月、大学文書館では箕面市在住の田中滋子(秀央長男のご夫人)様より元文学部教授田中秀央(1886~1974)関係の資料の寄託を受けました。8月より整理作業を開始していますが、秀央宛の書翰、様々な書類など総計3万点前後に及ぶ膨大な資料です。そのなかには西田幾多郎や田辺元、新村出からの書翰や、彼が編纂した『羅和辞典』のゲラと思われる文書があり、京都大学の歴史や西洋古典学史上非常に貴重な資料と考えられます。このたび、秀央にまつわる逸話について、秀央の四男の山崎和夫名誉教授(母方の姓を継ぐ)にご寄稿いただきました。

ついでに父の三高生活に少し触れておこう。当時三高の名校長として名の通っていた折田彦市校長は9月入学時に新生の一人一人と謁見されていた。父の印象は折田校長は実に質朴で、言葉もとつとつとしていて、心に描いていた古武士の姿そのものであったという。それで高名な校長と思えぬほど親しみを感じて、心安くお話が出来たという。最初寮に入った父が、睡眠時間のことで退寮したくなったが、病気でないと認められぬとのことで校医の鈴木先生に診てもらった話がある。この校医が三高寮歌に出てくる「喜ぶ者はトラ・カッケ…」と歌われた先生で、当時既にこの医者は学生の病気をすべてトラホーム又は脚気と診断されたという風評があったと書かれている。父は少しも病気はないと言われて困ったそうだ。三高のクラスメイトの名前も多く出てくるが、中でも父より三つ四つ年長で朝日新聞の「天声人語」の名付け親と言われ、そこによく論説を書いていた永井栄蔵氏もその一人で、日露戦争より復員された方で、可愛がってもらったそうだ。卒業後も時々会ったり文通していて、毎年の年賀状にその年の干支が絵筆で書かれていたので、大切に保存してあると書いているから、京大大学文書館へ寄贈された文書の中にあるはずである。又「紅萌ゆる」の作者澤村専太郎氏とは三年の時同じ組であつたらしい。三高を卒業して明治39年9月に東大へ入学しているが、入試の話は一言も出てこない。おそらく内申だけの無試験だったのだろう。父は京都が気に入っていたようなのになぜ東大かといえば、当時父の目指した文学科はまだ京都帝国大学文学科大学では授業を行っておらず、明治41年になってようやく開始したからで、東大以外では勉強できなかったのがあった。

(2)初恋の実った結婚。父は中学一年生の時に、かなり血縁の近い親戚の国松艶子に一目ボレをした。彼女の方は当時まだ数え年六歳であった。それからひたすらその思いを保ち、十六年後に見事にゴールインした。父はお金持ちの御曹司との縁談を断って、先代や

兄の借金の後始末に苦しむ貧乏学士であった自分に敢えて嫁いでくれた彼女に心から感謝し、これを人生の最大の喜びであったと記している。しかしこの幸せな結婚生活は僅か四年で艶子の結核による病死で幕を閉じる。その間に私の姉二人が誕生していた。しかしこの話は父の四十一歳の時に生まれた末っ子の私は全く知らなかった。晩年には父が「つまし」と名付けていた私の生母静江への配慮のせい、家庭内でその話を聞いた事はなかった。もちろん年長の姉や兄は知っていたのだろう。

(3)借金の棒引き、差し押さえの解除。父の実家は倒産した庄屋のようなもので、その先代頃からの借金に、唯一僅かながら経済力のあった父が知らぬ間に連帯保証人に名前を連ねていて、借金を払わねば父母の住む家が差し押さえられるという目に二度陥っている。最初は東大(常勤)講師の月給が三十円、中学の嘱託講師の英語の先生の時間給が五十銭の時代に、高利が加わって借金は五千円になっていた。困った父が、債権者に直接会って誠意を持って必ず払うからと、それを半分にしてもらって数年かけて完済した由。そのため各種のアルバイトをして月百円ほどの収入を得ていたようだ。二度目は父の兄の東京の岡崎某氏からの借金で、やはり直接会って、事情を詳しく話して何とかならぬかと懇願したところ、代議士であった岡崎氏が多分そんな事だろうと思っていたと言って父の眼前で証書を破って燃やしてくださり、父は感涙に咽んだという。この話は私自身父の口から直接何度も聞いた事があり、“人は決して自分一人で一人前になるものではなく、それは陰に陽に世の人々の御恩があることを決して忘れてはならぬ”と書いている。借金のトラブルでこんなに話がわかる人が今でもいるだろうか。父はこれらの幸運に比べれば、その後の世間的な成功は自らの不断の努力の結果として、来るべきものが来たという一種の安堵感ぐらいのものだったと書いている。実際父は身内の目から見ても規則正しく実によく勉強

する人であった。私がそうしたことが解る年頃になってもまだそうであったから、若い頃のその猛勉強ぶりは人目についたのだろう。父が東大の大学院生の頃、渋沢子爵家の寮寮という学寮の監督を頼まれた。自分は何も生徒達の学問上のお世話は出来ないと断ったところ「君はよく勉強するのだから、寮に来てただ勉強していて寮生に模範を示してくればそれでよいのだ」といわれて引き受けた由。同じような話は、父が京大へ来て、文学部の建物が新築された時(この建物はごく最近取り壊された)各教官の研究室の割り当ての相談の時、すべての同僚の教授達が「田中がもっともよく研究室を活用するから、田中が第一に自分の好きな部屋を選んでよい」といつてくれたそうである。

話を東大の頃に戻すと、父の最大の恩師はケーベル先生で、この先生によってギリシア・ラテン語という西洋古典語の世界に、それを専攻する最初の日本人として足を踏み入れる事になった。「君に中学の先生はさせたくない」と言っている期間まとまった支援をしてくださったこともあり、物心両面で文字どおり恩師と仰ぎ、父は書齋にケーベル先生の写真を終生掲げ感謝していた。勉強家の父が大学へ入って張りきって西洋古典語以外に五つの言語を学習していると先生に話したところ *multum non multa* (much not many) とさとされてそれらの勉強週三十二時間を半分にして、ギリシア・ラテン語に集中したとある。後年よく書いた *Festina Lente* (ゆっくり いそげ) は、せっかちであった父にケーベル先生が下さったものであった。

父は負けるのが嫌いであった。私の小学校低学年の作文の中で、確か家族で大文字山登山をした時の話題で、「他人に抜かれるのを、お父さんは負けるのがお嫌いなので…」と書いたことを記憶している。語学ならと自信のあったその父が、この人は手強い、これにはかなわんと思った唯一の日本人は、東大同期の仲のよい友達で、東大卒業時には明治天皇下賜の銀時計を手にし、後に英語学の泰斗と

なられた市河三喜氏であったという。東大時代には、渋沢栄一、穂積重遠、末松謙澄、浅野長勲(長武)等の有力者から借金を返すためにいろいろ仕事をもらって経済的に援助してもらったらしい。おそらく京大大学文書館で整理中の資料の中から何か興味ある発見があるかもしれない。又その頃東大の文学科の教授を除いた同僚では、月に一回くらい「閑話会」というだべり会を各人の家持ち回りで開いていたそうで、その出席者には、金田一京助、神保格、萩原藤吉、前田太郎、市河三喜、田中秀央、...などその後各界で有名となられた方々のお名前が十余名連なっている。さらに父の東大学生時代の高名な先生たちのお名前の中には上田万年や、英文講師の夏目金之助を見出す事が出来る。

父は常々“長にはなるまじきものにて候”と手紙などに書いてきた。多分、勉強の時間を惜しんで、であったが、時間に厳しすぎて誰も父を長には選ばなかったのだろうと思うが、二つだけ例外があった。一つは私が中学生の頃校長に頼まれて断りきれず、二年間父兄会長をやらされたこと。もう一つは京大で独文の成瀬無極教授が停年の時に頼まれて、ほとんどやった事がないのに京大の剣道部部長をやった事である。確かに父はその種の勝負に全力を傾けてやる事が好きで、当時の高専武道大会を岡崎の旧武徳殿へ熱心に観戦に行き、小学生の私も何度か連れていってもらったことを記憶している。成瀬教授は剣道の経験などどうでもよく、その熱心な愛好者である事が大切なのだと口説いたのであった。何かとやかましい父ではあったが、父は人の世話をよく見るという優しい面もあった。お弟子さんや学生の、又親しい友人などに頼まれての、就職の世話や、同僚教授宅へのお手伝いさんの世話など、何でも出来る事は親身になって力になり、本部地下にあった靴屋さんにも田中先生と慕われていた。

研究活動の資料とアーカイブズ

独立行政法人国立国語研究所 研究員 森本 祥子

京都大学大学文書館のことをきくとき、おそらく誰もがもっともうらやましいと思う点は、非現用行政文書がすべて文書館に移管される制度を実現したことだろう。とくに、大学史編纂の際に、大学が公的に作成・蓄積した文書を集めることに苦労した経験のある多くの関係者にとっては、それは夢のような制度に思われるかもしれない。なにしろ、すべての文書が大学文書館に移管されれば、大学の組織としての営みが「すべて」把握できるのだから——だが、この期待は正しいのだろうか？

この、「アーカイブズ管理システムが確立していれば、その組織のすべてがわかるし、アーカイブズはそうあるべきだ」という期待は、実は思いこみに過ぎない。そして、私も知らず知らずのうちに、その思いこみにとらわれていたように思う。たしかに、アーカイブズとして完成されたシステムをもてば、その組織の枠組みについて正確な情報が把握できることは間違いない。例えば、教授会の議事録が保存されているから組織の変遷の過程が追えるというような、整備された大学アーカイブズの利用経験者の話をきき、私たちは比較的安易に、大学のことはなんでもアーカイブズでわかるべきだ、とっていないだろうか？ 安易に、というのは、つまり、アーカイブズで扱うべき資料の範囲を確定しないままに、際限なくアーカイブズという機能に期待をふくらませてしまう、ということである。

こんなことをわざわざ書くのは、実は私自身が、組織のアーカイブズとなるべき資料と、組織が研究活動を行うなかで蓄積した、アーカイブズとはならない資料(以下、「研究資料」と称する)との違いを理解するのに、ずいぶんと時間がかかったからである。研究資料とい

ったときに、工学部の実験器具や考古資料をイメージする人には問題は起こらないのかもしれない。しかし私が勤務先で保存活用すべき研究



資料として関わることになったのは、国語研究所が各地で調査を行って採集した方言を書き留めた古いカードの山のような、紙資料のかたまりが中心だった。アーカイブズ畑にいる私にとって、それを管理するために思いつく手法は、第一にアーカイブズ管理のそれである。そこで、一般的なアーカイブズの編成・記述の手法をそのカードの山にあてはめる可能性を考えてみた。大丈夫、何の無理もない。しかも、このカードは研究所が自ら作成したものだから、まさしくアーカイブズではないか。最初に資料をみたときにそのように思いこんだため、私はそれ以後ずっと、研究資料をアーカイブズの一環だとしてごく自然に思ってきた。

しかし、ひとつ問題があった。それは、研究資料のライフサイクルがよくわからないということである。アーカイブズは、現用のレコードが非現用になり、評価選別を経て保存されたものであるはず。ところが、方言のカードがいつまで現用なのか、明確に言えない。そしてそれと関連するのだが、そもそも現用という段階でなされているべき文書管理システムに、研究資料はうまくのりそうにない。方言のカードは、文書管理規程にのっとって作成・管理されるわけではないのだ。このようなライフサイクルのはっきりしない資料

を、どのようにしてアーカイブズ資料ととらえたいのだろうか？

悩んだ末に私が思いついたのは、カードを法人文書(行政文書にあたるもの)の添付資料と位置づけることだった。つまり、こうである。方言を採集するために、研究員は各地に調査に出かける。そのためには出張に関わる書類が作成される筈である。集めたカードは、いわば復命書の一環として添付される資料というようなものだ。そう考えれば、カード自体が厳密なライフサイクルを持たなくても、文書管理の流れに乗せることができる。これでライフサイクル問題は解決。方言のカードは、無事アーカイブズとなった。

ところが、この構想は相談した文書館で一笑に付された。考えてみれば当然である。例えば大学のような大規模な組織で行われている研究活動の多様性と、資料のさまざまな蓄積のしかたを考えたときに、この発想に相当の無理があることは明らかである。そういう無理をしてまで、なんでもすべてをアーカイブズという視点から捉えようとするのは、アーカイブズ概念をむやみに拡大解釈する危険をはらんでいる。そして、アーカイブズ概念がさまざまに設定されているということは、日本中でずっと混乱を招いてきたはずなのだ。そうしたことを一方では承知しつつ、もう一方で自分がこのような強引な発想をしたことに苦笑した。

では、この構想の落とし穴はどこにあったのだろうか。たぶんそれは、アーカイブズとは組織の記憶をすべて持っているところだ、という思いこみがあったことと、アーカイブズを理念から考えずに物理的な管理の手法からとらえてしまったことだと思う^{*1}。

アーカイブズでは何を管理すべきか。それは言うまでもなく、京都大学大学文書館でも第一に収集対象として挙げている行政文書、すなわち組織の運営に関わる文書である。組織の営みの枠組みを押さえられるこれらの文書は、アーカイブズのコアとして必須である。行政文書の移管義務規定の整ったアーカイブ

ズでは、アーカイブズが組織の枠組みについてのすべての記憶を持っているところだという理解は、間違っていない。

しかし同時に、大学や研究機関など、研究を目的とする組織では、アーカイブズの視点からだけでは、その組織の蓄積した資料や情報の全体像を掌握しきれないとも思う。これは、「県庁」という行政組織では「公文書館」を作れば組織の活動記録をかなりの割合で残せることと、異なる点である。さきに書いた私の強引な論法は、目の前の研究資料なしには組織の存在意義を証明することができない、研究機関としてどのような活動をしてきたのかということが示せない、という直感が出発点になっている。

たぶん、研究資料は博物館資料として扱うべきであろう。ただ、研究機関全体の資料保存体制としては、研究を行ってきた経過にまつわる情報——いつ、誰が行った研究か、というようなアーカイブズの資料で確認しうる情報——と、研究資料そのものが密接に結びついていること、また、博物館の収集方針がアットランダムなものではなく、組織全体の研究活動をバランスよく反映しているものであること、この二点が強く望まれると思う。

研究資料はアーカイブズにはならない。しかし、その保存管理にアーカイブズという視点もからめることで、その資料が組織の存在証明の重要な一端を担いうる。と同時に、作成当時の秩序を崩さず、資料のコンテキスト情報を記録することを重視するというアーカイブズ管理の手法は、研究資料の将来の多様な活用の可能性をひらく。

研究機関の場合、アーカイブズも博物館も、ともに独自の理念が必要だろう^{*2}。しかし、両者とも、それぞれの機能の定義を拡大解釈することで対処してはならない。むしろ、各々が本来の理念を堅守し、コアとなる資料の保存活用を考えたいうえで、関連する資料との関係にも目を配るとき、はじめてその機関全体の「知」が総合的に保存され、活用されるのだと思う。

研究資料とアーカイブズとの関係、とくに、どのようなシステムで双方をつなげればともに保存・活用できるのか、ということについて、私自身はまだ考え始めたばかりである。勝手な要望だけれども、アーカイブズとしてのコアを確立した京都大学大学文書館には、ぜひ大学全体の「知」の保存活用へのアーカイブズとしての関わり方について、アイデアを出していただきたいと思います。

*₂ 大学博物館の特性については、西野嘉章『大学博物館：理念と実践と将来と』（東京大学出版会、1996）を参照。

*₁ アーカイブズの定義を管理の手法からとらえることの問題点は、富永一也「公文書館論」（『沖縄県公文書館研究紀要』3号、2001）を参照。

大学文書館の動き

第三高等学校新徳館の屋上塔屋が復元されました

本年5月、総合人間学部1号館地階に、旧第三高等学校にあった新徳館の屋上塔屋が復元展示されました（写真上）。

新徳館は、大正天皇大礼と第三高等学校創立五十周年を記念して建設が計画され、1918（大正7）年5月1日の創立五十周年記念祭当日に現在の総合人間学部1号館の地に竣工しました（写真下）。新徳館は、本部本館も手がけた著名な建築家武田五一の設計になり、入学式や卒業式をはじめとした様々な式典や講演会などに利用されました。その屋根の上にあった塔屋は、排気筒としての役割を果たしましたが、上部に付した避雷針、祇園祭の鉾の形を模した袴などの独特の形状から、新徳館の象徴的存在となっていました。

1982（昭和57）年に新徳館が老朽化のため解体されてから、この塔屋は三高同窓会の手によって保存されていました。京都大学と密接な関係にあった第三高等学校の歴史を偲ぶため、このたび大学文書館により往時の姿に復元し、展示するものです。

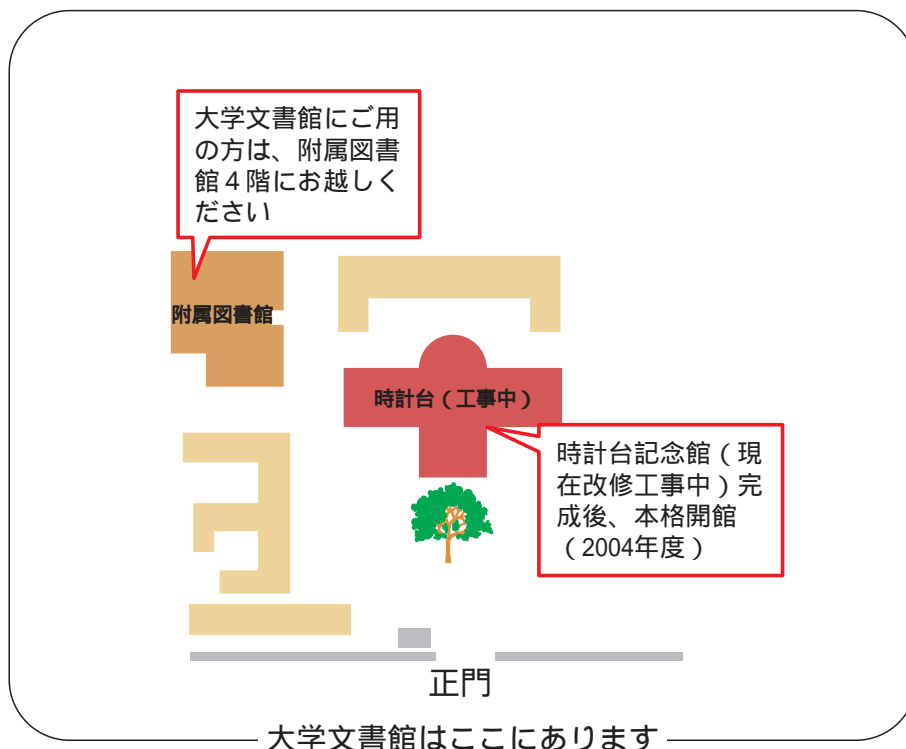


〔日誌〕(2002年4月～9月)

- 2002 / 4 / 4 小野和子氏より、大学紛争関係資料寄贈。
- 4 / 9 大学文書館教官会議。
- 4 / 11 事務局施設部より、学内の現存しない建物の図面を受領。
- 4 / 15 教官より、工学部6号館・8号館について照会。
- 4 / 17 近江八幡市役所より、大学文書館について照会のため来館。
- 4 / 22 事務局より、行政資料を受領(5月まで)。
日本テレビより、創立期の京都大学について照会(4月30日放送)。
- 4 / 30 『京都大学大学文書館だより』第2号、発行。
- 5 / 1 松本誠名誉教授より、理工科大学教授関係資料(アルバム・書簡等)寄贈。
京都新聞社より、旧第三高等学校新徳館屋上塔屋について取材のため来館(5月9日夕刊に掲載)。
- 5 / 9 朝日新聞社より、総合人間学部A号館および旧第三高等学校新徳館屋上塔屋について取材のため来館(5月15日夕刊に掲載)。
- 5 / 16 大学文書館教官会議。
- 5 / 20 京都新聞社より、「～回生」という表現について照会のため来館(5月25日夕刊に掲載)。
- 5 / 22 西山助教授、全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・総会に出席(於明治大学)。
- 5 / 24 西山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)近畿部会研究部会に出席(於大阪市公文書館)。
- 5 / 26 西山、京大瀧川事件記念会に参加(於学士会館)。
- 5 / 30 学外より、元化学研究所助教授について照会。
- 5 / 31 保田助手、全国大学史資料協議会西日本部会総会・研究会に出席(於大阪国際大学)。
- 6 / 4 教官より、1910年の文学部教官の中国出張について照会。
- 6 / 7 濱口博章氏より、文学部関係資料寄贈。
学外より、元医学部教授の出生地・生没年等について照会。
朝日新聞社より、1968年前後の寄宿舎の状況について照会。
- 6 / 10 西山・嘉戸助手、有賀鐵太郎元文学部教授関係資料の調査のため出張(於京都市北区)。
- 6 / 12 田中滋子氏より、田中秀央元文学部教授関係資料寄託。
- 6 / 18 文学部心理学教室より、元文学部教授の肖像画二点寄贈。
- 6 / 26 日本経済新聞社より、大学文書館の業務・所蔵資料等について取材のため来館(7月6日夕刊に掲載)。
- 7 / 8 大学文書館教官会議。
- 7 / 22 大学文書館教官会議。
- 7 / 25 名誉教授より、敗戦直後の公職追放について照会。
- 7 / 26 西山・岸本総務課課長補佐、神奈川県立公文書館へ出張。
- 8 / 5 京都新聞社より、原子爆弾災害総合研究調査班について照会(8月9日朝刊に掲載)。
- 8 / 8 オープンキャンパス2002開催。フリー相談コーナーにおいて、京都大学の歴史をパネルで展示(～9日)。
- 8 / 19 本部事務局棟1階ホールに京都大学の歴史に関するパネル展示設置。
- 8 / 21 加藤利三名誉教授より、輻射物理学

- 教室関係資料寄贈。
- 8 / 22 西山、大阪市立大学大学史資料室へ出張。
- 8 / 27 埼玉県立文書館より、大学文書館の業務等について照会のため来館。

- 8 / 28 大学文書館教官会議。
- 9 / 12 朝日新聞社より、大学の歴史に関する授業について取材のため来館(10月22日夕刊に掲載)。



資料提供のお願い

大学文書館では、京都大学の歴史や学生生活などに関する資料を収集しています。

現在、2004年度の本格開館に向けて、京都大学の歴史に関する展示の準備を行っております。特に、戦前から現在にいたる学生生活に関する資料(卒業証書、学生服、ノート、写真など)をお持ちの方には、是非、ご協力いただきたくよろしくお願いたします。

ご協力いただける場合は、下記までご連絡ください。

Tel : 075-753-2651

Fax : 075-753-2025

E-mail : archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

講座制の歴史の一コマ——講座給について——

京都大学大学文書館助手 嘉戸 一将

国立学校設置法の改正により、国立大学に置かれる講座等は、各大学に委ねられることになった。京都大学でも、2002(平成14)年4月1日に「京都大学の講座、学科目及び研究部門に関する規程」が定められた。これは、「法人化」に関する論議でもしばしば用いられている「大学の自主性・自律性」という考え方を反映した改革だと言うことができるだろう。「大学の自治」という言葉を避けるために案出されたものだとも言われるこの表現のデリケートな点については脇に置くこととして、ここでは講座制の歴史の中の一コマを振り返ることにしよう。

戦前の(正確には、1893年から1946年まで)帝国大学には、「講座二対スル職務俸」(以下、「講座給」と表記する)という制度があった。これは本俸とは別に、講座を担当する教官に給付されるもので、帝国大学高等官官等俸給令(以下、「俸給令」と表記する)で定められていた。講座給は講座制と同時に導入されており、講座給と講座制は密接に結びついている。講座給・講座制の目的は、これを創設した井上毅(当時、文部大臣)によると、若手教官の官庁への流出を防止するために、業績や能力を考慮して待遇を改善すること(例えば、教授と助教授の俸給の格差が縮まることになった)そしてそれぞれの専門分野における責任を制度化することにあった。しかし、この制度は《政治的な》性格をはらんだものでもあり、専門に専念させることで教官の非政治化を図るという効果が期待されていたとも言われ、さらには講座給の額については文部大臣が定めることとされ、いわば行政権力がそれぞれの学問分野を格付けすることを意味した(寺埜昌男氏により、実用的なものよりも非実用的なものの方が高いという特徴が指摘されている)。

京都大学には創立期以来の行政文書『講座



講座給関係書類(大学文書館所蔵)

給関係書類』が保存されている。それによると、創立された1897(明治30)年の理工科大学(理学部と工学部の前身)の講座給は、年額700~800円(現在の700~800万円程度か。ちなみに、本俸は助教授300~800円、教授800~1600円と俸給令で定められており、また余談だが、当時の高等官の初任給は年額にして600円、銀行員の初任給は同じく420円程度であった)と、講座によってばらつきがある。しかし、1899年以降に新設された講座については理工科大学長・総長から文部大臣への上申通りの額に決定されており、また1899年に設置された法科大学(法学部の前身)や医科大学(医学部の前身)、1906年に設置された文科大学(文学部の前身)では、全講座一律750円とされており、さらに1908年の改定では理工科大学も含む全講座で850円とされた。その後物価や財政状況の変化に伴い、何度か改定され、また本俸と講座給の合計額の上限が定められたために教官によって多少の違いは生じたが、学問分野の格付けがなされたとは言えない。

学問・研究を行政権力による保護と統制の下に置くという《政治的な》制度として出発した講座給・講座制だが、その運用の歴史の中で制度の創設者の意図から離れ、教官の待遇を純粋に保障し、パラドクシカルにも「大学の自治」を支えることになったのである。